

神戸大学と

Across the Boundaries 神戸大学のメタモルフォーゼを伝えるメディア

No.10

わたし



「大学と社会の結び目」
テレビプロデューサーの仕事とは？
NHKプロデューサー 菓子浩さんに聞く
「ききん・だより」募金状況・事業展開報告、ほか

ドラマ作りのベースには
「リアリティ」がなければならない。

【神戸大学基金を大きく育てよう】

●クラブ活動<いま・むかし>

創部100周年を迎えた
「神戸大学陸上競技部」

凌霜陸上競技部OB会会長・稲野廣さんほか、
OB・現役のみなさん

●基金の実施例紹介

国際協力研究科「海外実習」「高度海外研究」への支援



ドラマ作りのベースには「リアリティ」がなければならぬ。

阪神・淡路大震災のとき、芦屋で中継車と合流するために三宮から国道2号線を歩いた。そこで見た震災の現実には、抗しがたく巨大なリアリティの喪失だった。しかし、避難所で接した人の優しさは、それを取り戻すきっかけとなった。報道でもドラマでも、根っこにあるのはリアリティ。どこまでそれを伝えることができるかだ。

●NHK流仕事の覚え方

菓子さんがNHKに入局したのは1993年。職種は「ディレクター」、配属は京都放送局だった。

「もともとはドラマ志望だったのですが、京都ではどちらかと言えば報道系の仕事をしていました」

（プロフィール）
菓子浩（かし・ひろし）
1968年生まれ。富山県出身。富山県立富山中部高校、神戸大学経営学部を経て、1993年、NHK入局。京都放送局を皮切りに、東京、大阪、東京と番組制作のディレクターおよびプロデューサーとして経験を蓄積。2013年に大ヒットした連続テレビ小説「あまちゃん」では、プロデューサーとして活躍。学生時代に演劇研究会「はちの巣座」に入り浸った経験が活かされている。



NHKでは、きちんと番組作りを教えるから配属するということではなく、すべてはOJT（オンザジョブトレーニング）だ。例えば、朝のニュース『おはよう日本』の中の3分、5分のコーナー企画から、悪戦苦闘して仕事を覚えていきなさいというスタイルなのである。

「今から考えればなぜあれほど苦労したのかと思います。徹夜で書いた3分コーナーのコメントをボイと捨てられて、ボロボロにな

りながら仕事を覚えていくという感じです」

そうした経験を生かしながら、『クローズアップ現代』などの情報番組やドキュメンタリー、『堂々日本史』など京都ならではの歴史番組や美術番組、また立ち上げから携わった紀行番組『とびつきり京都』などを制作し仕事を覚えていったという。

●忘れられない経験「阪神・淡路大震災」

菓子さんは京都放送局に1998年までの5年間勤務したのだが、その間に1995年の阪神・淡路大震災が起こった。

「朝6時ごろに京都放送局に着いて緊急対応していると、7時少し前に初めて神戸の中継映像が飛び込んできました。ビルが倒れ、街がまた燃えているような状態です」

こんなとき、NHKでは何はさておき現地に駆けつけることになっている。菓子さんも指令を受けて神戸に向かった。阪神高速が使えないので、神戸の北隣の三田市から六甲山を貫く新神戸トンネルを経由して神戸放送局に入った。そこで無線機を1台持たされ、中継車がいま芦屋に向かってるから芦屋に行けという。中継車と合流して中継を出せということだ。国道2号線を歩いて芦屋に向かった。



●天野家セットの前で

「こういうときのNHKはずいぶんと思うんですが、なぜか来るんです中継車がいっぱい。まだ午前中だったと思いますが、名古屋や福井、岡山から来た中継車もありました」

それから結局3日間、車で寝泊りしながら、芦屋市役所や西宮市の土砂崩れ現場から中継を出した。

「芦屋に向かって国道2号線を歩いていると、1階がべしやんこになったマンションがあつて、そこに人がいるのは分かっているのにどうしようもなく。家族の名前を呼び続ける人がいたり、まだ煙が出ている場所があったり、そういう状態のところを歩いて行くのですが、正直、あまりにも起こっていることが大きすぎて、現実感がないままずっと歩いていました。そして、ずっと中継を出してました」

しかし、この「現実感の喪失」は、思わぬところでリセットされた。

「妙に覚えているのは、とにかく人が優しく、それだけすくなく覚えています」

避難所はトイレの水が流れないし、自動販売機も何もなければ、「兄ちゃんご飯食べたか」とか、「飲み物、炊き出しあるぞ」とか色んな人が声をかけてくれた。

「人の本質（リアリティ）ってこういうことなのかな、そういう状態に置かれてなお優しくなれるのは素敵だな」という印象が強く残っています」

そのあと京都放送局では、震災関連の番組制作に携わった。NHKスペシャルの「シリーズ阪神大震災」をやったり、神戸から京都に集団疎開してきた子供たちを追うドキュメンタリーを手がけたりした。

●朝ドラ『あまちゃん』のプロデューサーへ

「このまま報道に行ってもいいなと思っていたら、東京のドラマ番組部へ転勤になりました」

ようやく最初の志望コースに進めたわけである。それから4年ほど東京にいて、大阪に異動になり、2010年の秋にふたたび東京に戻った。大阪時代には、『風のハルカ』『芋たこなんきん』『ちりとてちん』『ウエルかめ』などの朝ドラやそのほか多くのドラマの演出・プロデューサーに携わっている。

そして、東京転勤後ほどなくして、朝ドラ『あまちゃん』のプロデューサーに抜擢された。東日本大震災後の閉塞状況に抗して笑いの一大ブームを巻き起こした『あまちゃん』は、朝ドラ史上初物づくしの画期的なドラマとして成功した。

では『あまちゃん』の制作にはどんなスタッフがかわかっているのだろうか。

『プロデューサーが2人、ディレクターが10人、外部の助監督が4人ほどいて、あとロケ地を探してきたコーディネイターするスタッフが4人ぐらいいるので、だいたい20人ぐらい制作のスタッフがいます」

もちろんこれだけではドラマはできない。

現場のスタッフが必要だ。

「デザイナーや美術進行、大道具、小道具、衣装、メイク、持道具などの美術スタッフ、撮影、照明、音声、ビデオエンジニアなど技術スタッフ、さらに撮り終わったあとに編集したり音を付けたりとというスタッフもいますので、150人くらいになると思います」

そのほか、例えば番組広報とか、ダイジェストやホームページの制作、副音声や字幕放送など、見えないスタッフも入れるとすごい数になるのだという。

●プロデューサーの仕事とは

菓子さんたちプロデューサーはどんな仕事をするのだろうか。ディレクターとの違いはどこにあるのだろうか。

「ディレクターはNHKでは演出と言いますが、台本をもとにいかにお芝居を俳優にやらせて、それをいかに魅力的な映像で切り取っていくかという、1本1本のクオリティを作っていく立場ですね」

これに対して、プロデューサーの仕事はもうちょっと広くなる。

「一般的に言うところ、こういうドラマをやりたいという企画から、ついでにこういう脚本家でこういう俳優さんでやりたいとなつて大きな枠を作っていくのがプロデューサーです」

とはいえ、実際にはキャスティングも脚本作りも、脚本家とディレクターとプロデューサーが相談しながらやるケースが多いという。その後、芝居付けの部分はもっぱらディレクターの仕事になるが、撮ったものの編集や音付けのプロセスでプロデューサーが試写をして完成度を高めていく。

プロデューサーの仕事は番組制作だけではない。予算管理や労務管理、放送後の視聴者



●NHKスタジオパーク前にて

対応などかなり幅広い。なかでも番組のPRは大変な仕事だ。

「大勢の力を結集して作ってるので、できるだけ多くの人に見てもらいたい。パンフレットの原稿も自分で書くんですよ」

最近では、ツイッターやLINEなどPRの形態も急速に変わってきているという。

●学生時代は演劇とバイト三昧

菓子さんは実は「NHKに入ってドラマを作りたい」と高校生のころから思っていたそう。友達と一緒に、昔の白黒映画を500円で見せてくれる市民サークルに通いつめ、NHKで放送されたニューウエーブドラマとか唐十郎さん原作のドラマに夢中になった。その流れでNHKに行きたいと言っていたら、「らしい」とあいまいなのは、大学に入ってからほかに熱中することができて、しばらく忘れていたからだ。

『はちの巣座』という演劇サークルに入っていて、大学に行くときまずは部室に直行とい

う感じでした」

必ずしも芝居が大好きだったからというわけでもないようだ。

「面白い先輩たちがいたので、入り浸っていたという感じです。1年上に佐々木蔵之介さんがいたり、『平清盛』にも出ていた腹筋善之介さん、劇作家・演出家の西田シャトナーさんも時期が重なって、同じ舞台をやったりしていました」

フィクションであるドラマは、自由に物語を創作しているように思われるが、実は一番大切にしているのは取材だという。

「リアリティの積み重ねでドラマの厚みが増します。『あまちゃん』でも脚本の宮藤さんやスタッフが岩手に何度も足を運び、北三陸の風土とか暮らしぶりを肌で感じてきました。流行語になった『じぇいじぇい』も、そうして見つけてきたものの一つです」

学生時代からひたすら熱中していたのは、ドラマの「リアリティ」を探ることだったのかもしれない。



●番組宣伝パンフの制作もプロデューサーの重要な仕事



種目は違っても一緒に戦っているという意識を持つ——それが100年続いた原動力。

純粋な個人種目というイメージが強い陸上競技ですが、神戸大学陸上競技部は伝統的に大学対抗戦を重視しています。これによって、種目は違ってもチームとして一緒に戦っているという意識が醸成されます。そして、この結束力はOBにもなっても持ち続けられ、創部100周年を迎える原動力となったのです。そのリアルなプロセスを、OB会と現役の役員に聞きました。

●昔も今も「対校戦」での勝利が部としての目標

神戸大学陸上競技部が代々目標としてきたのは「対校戦」（大学対抗戦）。そこには、歴史ある旧三商大戦など複数あるが、「中でも力を入れているのが『関西インターカレッジ』（関西学生陸上競技対校選手権大会）で、年間を通じて最大の力を結集しています。開催時期は新入部員にとって入学後間もない5月ですが、団体として勝つことに心血を注ぐ先輩たちの姿勢を見て、競技に対する認識を新たにしようです」（前田部長）

1921年に始まった「関西インカレ」は1

部と2部からなり、ここ数年、神戸大学は2部の上位に位置している。当面の目標は1部への昇格。そのとき求められるのが現役のチームワークとしての総合力と、それを支えるOB会の結束力だ。

対校戦には各種目の順位ごとに点数が設定されていて、全種目の総合得点で大学間の順位が決まる。「対校戦に勝つためには、個人の技量とともに、部としてのチームワーク、つまり総合力が必要です。短距離、長距離、跳躍、投てきなど、専門ごとの力を結集できるチーム力、OB会を含めた部としての結束力が非常に大事になるのです」（稲野さん）

対校戦には各各種目の順位ごとに点数が設定されていて、全種目の総合得点で大学間の順位が決まる。「対校戦に勝つためには、個人の技量とともに、部としてのチームワーク、つまり総合力が必要です。短距離、長距離、跳躍、投てきなど、専門ごとの力を結集できるチーム力、OB会を含めた部としての結束力が非常に大事になるのです」（稲野さん）

部と2部からなり、ここ数年、神戸大学は2部の上位に位置している。当面の目標は1部への昇格。そのとき求められるのが現役のチームワークとしての総合力と、それを支えるOB会の結束力だ。

稲野 廣
凌霄陸上競技部OB会会長
(経営・1957年卒)



坂 幸夫
副会長
(経済・1964年卒)



濱田豊機
(経済・1968年卒)



椎木茂久
事務長兼100年史発行事務局長
(経済・1969年卒)



平田明男
事務次長
(工・1970年卒)



前田正登
陸上競技部部長
(発達科学部教授)



こうした事情は今も昔も変わらないが、関西インカレに「標準記録」制度が導入されて以降、より重要になった。一定の基準をクリアした選手のみ予選にエントリーできるというものだが、「今は標準記録にAとBの2ランクがあって、1人でも出そうと思えば、最低でも標準のBは切っていなければならぬ。2人出す場合はAとBをクリアという具合に決まりがあって、全体のレベルを上げていかないと総合得点で上位に行くのは難しくなっています」（平田さん）。個人の實力を上げること自体は目標として同じだが、チームの一員としてのモチベーションが、より一層求められるようになったといえるだろう。

さらに1部昇格を果たすためには、多くの安定した戦力が必要だ。「2部から1部への昇格を目指すときには、得点を取れる選手がたくさん集まって、1点2点と拾っていく。それを足していったら100点前後を取る必要がある。つまりチームとしての力がなければ1部には上がれないのです」（坂さん）

関西インカレと同様に重視している「関西学生駅伝」もまた、団体としての力が、より分かりやすい形で試される。こうしたチーム力、結束力は陸上競技部を支える背骨だが、それは同時に連綿と続くOB会組織の土台にもなっている。「OB会が続いてきている原点には、種目が違っても一緒に戦ったという思いがあるのです」（稲野さん）

2013年10月には約200名の参加者を集め、創部100周年記念式典が行われた。あわせて『創部100周年記念誌』を発行したが、それを可能にしたのも堅固なOB会組織があればこそ。「原稿・資料集めから言っても、足掛け10年の歳月をかけて完成させました。OB・OGによる回顧集のほか、全体の三分の二は歴代大会や個人記録など記録集で構成されています」（椎木さん）

400頁近くもある記念誌は、現在8000名いるというOB会員の陸上競技部を思う心、結束力が形になって現れたものだといえる。古くからの資料収集を含め、こういう形にまとめることができたことに、他校も驚いているそうだ。

OB会の誕生は100年前の創部とほぼ時

現役世代から

1部昇格と駅伝シード権の獲得を目標に



茂原哲也 主将（法学部3回生）左
岡野達哉 主務（発達科学部3回生）右

茂原さん（主将）「対校戦に勝ちたいという思いは代々引き継がれており、自分自身が幹部学生になったとき、その気持ちがいよいよ強くなりました。関西インカレは1部がメインの試合で、2部は1部の前座のようだと感じています。来年はすでに2部が確定していますが、後輩には1部という大舞台で戦ってもらいたい。後輩に何か残したい、自分たちの代に1部昇格を果たしたいという思いで、日々陸上競技に取り組んでいます」

岡野さん（主務）「部活としては関西インカレと関西学生駅伝の二つが大きな目標で、特に駅伝のシード権の獲得が、関西インカレの1部昇格と並ぶ目標です。近年、関西のレベルが上がり予選会の突破も簡単ではないのですが、シード権を獲得することで、次の年、いきなり本戦に出られるというのはかなりアドバンテージです。上位8校以内に入り、次の年のシード権をなんとかして取り、後輩に残したいと思っています」

を同じくするが、その最大の目的は、当時から変わっていない。現役部員のサポートだ。「現役時代には3年4年が1、2年の面倒を、先輩が後輩の面倒を見るのが伝統です。OBも学生の試合の応援に行ったり、OB会費から学生の活動費を支援するなどしています。そうしたOB会結束の原点、要になっているのは、母校愛というか、後輩に何とか頑張ってもらいたいという気持ちです」（濱田さん）

先の記念式典では、神戸大学基金に100万円が寄贈され、学長にその目録が手渡された「ききん・だより参照」。こうしたOB会の存在と支援は、現役学生にとって、これからもさらなる飛躍のための力強い味方であり続けるだろう。

グローバル時代の国際協力を担う 人材育成・研究高度化を支援

グローバル化の進展とともに、日本発のグローバル人材の養成が求められています。神戸大学大学院国際協力研究科では、「国際公務員養成プログラム」と連動して「海外実習」や「高度海外研究」を実施し、教育と研究の高度化を推進しています。神戸大学基金では、これらの活動を支援し、神戸大学の国際化対応力の向上に貢献しています。

●質問に答えてくれた人：

宮廻潤子さん

(みやまわい.じゆんこ) 博士課程前期課程1年

森 瑞穂さん

(もり.みずほ) 博士課程前期課程1年

上田匡邦さん

(うえた.まさくに) 博士課程後期課程2年



●上田匡邦さん

●森 瑞穂さん

●宮廻潤子さん

●「国際協力研究科」とは？

Q 「国際協力研究科」は学部のない大学院という位置づけのようですが？

A 実際には複数の学部をベースにしていくとも言えます。国際協力研究科は、神戸大学の教育研究リソースを横断的に、総合的に集めて、多面的な国際協力の教育研究が展開できるようになっています。修士(国際学)や博士(学術)の学位、または経済学・法学・政治学の修士・博士の取得が可能です。

Q どんな教育研究を展開しているのですか？

A グローバル時代の国際協力に求められる人材育成と研究の高度化。これを、国際学、開発・経済、国際法・開発法学、政治・地域研究の4つのフレキシブルな教育プログラムでカバーしています。

Q 海外実習と高度海外研究はどういう位置づけになりますか？

A いずれの専攻においても国際性を身に付けるための実践の場として実施されます。私たち(宮廻・森)の場合、国際環境法の中の実習として取り組み、すでに海外で国際公務員として活躍している先輩との面会や国際機関の見学、あるいは世界の注目を集めている国際裁判の傍聴などを実施しま

した。私(上田)の場は、高度海外研究として、国際司法裁判所(ICCJ)における南極捕鯨事件の口頭弁論の全日程を傍聴し、またハーグ周辺の研究機関等を訪問しました。

●「国際公務員」への道を拓く

Q 海外実習や高度海外研究の成果をお聞かせください。

A 私(宮廻)は、国際環境法で勉強していた南極捕鯨事件について国際司法裁判所の口頭弁論を直接目にする事ができて、非常に緊張感のあるやり取りに目を見張りました。

Q また、国際公務員として働いている多くの方々にお会いしてお話をうかがうことができているのは、国際公務員になりたい」と思っていたことにリアリティが出てきました。その難しさと同時に多様なキャリア形成の可能性があることも分かり、考えるべきことが増えました。

Q 森さんはどうですか？

A 私も南極捕鯨事件の口頭弁論を傍聴したのですが、非常に有益な経験ができました。わたしは海事科学出身で、特に海洋法に強い興味を持っています。カリフォルニア海事大学に短期留学し、国際海事機関(IMO)で働きたいという気持ちが強くなり、国際協力研究科に入学したのです。今回の海外実習を経験しますますその気持ち

が強くなくなっています。

Q 「真剣勝負」の口頭弁論を前に上田さんの場合はどうですか？

A 私は、特に「環境に関する国際紛争の解決制度」に関心があり、国際司法裁判所や国際海洋法裁判所での係争事件や、環境条約の下で設立された不遵守手続の交渉動向を博士課程前期課程にいた頃から追いかけてきました。このテーマに即して、南極捕鯨事件の場合を研究するためにハーグへ行ってきたわけです。

Q 成果はどうでしたか？

A 相手の出方を受けて弁論の力点や内容を巧みに変化させ主張を展開する弁護人の様子がとても印象的でした。国際法に基づいた論拠を明確かつ詳細に提示していたという点で日本の方が説得的でしたが、事実のどの部分に注目するかによって評価が大きく分かれると思います。研究に資する情報や知識が得られました。

私が強くなくなっています。



きぎん・だより

「基金の募金状況」

「神戸大学基金」の
取組みのご報告と
さらなるご支援のお願い

「神戸大学基金」の平成25年9月30日現在の募金状況はグラフのとおりです。

本学は、平成24年5月15日に創立100周年を迎え、より多くの皆様方から「神戸大学基金」にご厚意が寄せられました。ここに心より感謝を申し上げますとともに、今後世界的な存在感のある競争力のある大学となるために、構成員一人ひとりが「真摯・自由・協同」の精神を共有しつつ、更なる飛躍を参りますので、今後とも皆様方からのご理解とご支援をお願い申し上げます。

「基金の事業展開内容」

国際化への対応をはじめ、
多彩な活動を支援

神戸大学基金（基盤事業）の展開内容は、以下のとおりです。

- ① 明確な目標を持った優秀な学生の海外留学・研修への派遣支援として
海外派遣・語学研修・留学・海外インターシップ・ボランティア・国際学会等派遣事業
- ② 海外に向けた発信への支援として
研究者向け英語個人指導・学部生向け英語プレゼンテーション指導等
- ③ 海外からの優秀な留学生・研究者の受入と

して

ダブルディグリープログラム等に参加する協定大学から来学してくる海外留学生への支援

④ 神戸大学基金緊急奨学金制度の充実

・神戸大学基金緊急奨学金（災害や不慮の出来事による修学・生活困窮学生への支援）
・神戸大学基金奨学金（優秀かつ生活が困難している新一年次生への支援）

⑤ 課外活動（ボランティア活動を含む）支援

・東北ボランティアバスへの支援
・顕著な活動実績をあげた課外活動団体・個人への支援

⑥ 東京地区におけるプレゼンス向上活動支援

・首都圏における同窓生とのネットワークの構築・強化
・首都圏における情報発信業務・イベント等への支援業務

・在学生の首都圏における活動支援

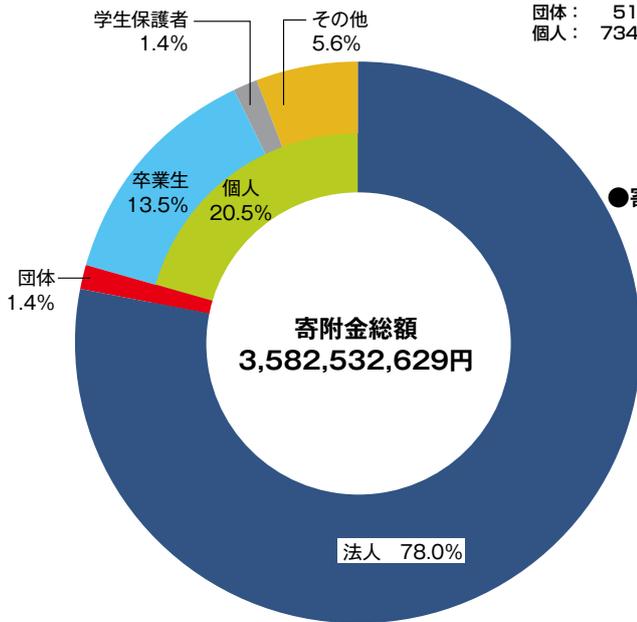
■2013年11月16日、陸上競技部の創部100周年を記念する式典が出光佐三記念六甲台講堂で開かれ、OB・現役のみならず200名が参加しました。この場で、陸上競技部OB会から神戸大学基金に100万円の寄附が寄せられ、目録が学長に手渡されました。



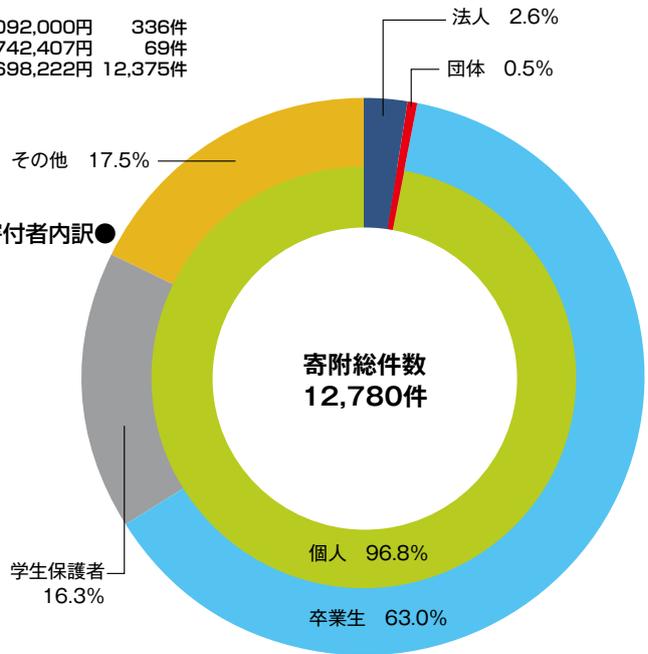
●図で見る神戸大学基金募金状況
(2013(H25)9.30現在)

寄附金総額：3,582,532,629円
寄附総件数：12,780件

【内訳】
法人：2,796,092,000円 336件
団体：51,742,407円 69件
個人：734,698,222円 12,375件



●寄附者内訳●



■法人：2,796,092,000円
■団体：51,742,407円
■個人：734,698,222円
(個人内訳)
■卒業生：485,267,051円
■学生保護者：49,917,000円
■その他(学内教職員/名誉教授/卒業生保護者等)：199,514,171円

■法人：336件
■団体：69件
■個人：12,375件
(個人内訳)
■卒業生：8,047件
■学生保護者：2,089件
■その他(学内教職員/名誉教授/卒業生保護者等)：2,239件

■また、式典では、前田正登・陸上競技部長から兵庫県高等学校および中学校体育連盟陸上競技部代表にそれぞれ記念品が渡されました。



ご寄附いただく方法

【個人のみなさま】

神戸大学へのご寄附に對しましては、寄附金額から2千円を除いた額について所得控除を受けることができます。また、平成23年1月1日以降のご寄附より、本学に寄附した翌年1月1日に神戸市にお住まいの方は、神戸市個人市民税の税額控除を受けられます。

ご寄附の申込方法は、本学指定の払込取扱票でのご寄附のほか、インターネットからご寄附いただくことが可能です。

本学指定の払込取扱票がお手元のない方は、お名前・住所・電話番号を下記の基金推進室までお知らせください。折り返し払込取扱票一式をお送りします。

インターネットからのご寄附は、神戸大学ホームページからクレジットカード決済、インターネットバンキング、銀行振込のいずれかをお選びいただくことが可能です。詳しくは、左記のホームページでご確認ください。なお、クレジットカード決済をご利用いただけるカードは、「JCB」「VISA」「MasterCard」「AMEX」「Diners Club」です。



<http://www.kobe-u.ac.jp/info/kikin/kifu-personal.html>

【法人のみなさま】

所定の寄附申込書に必要事項をご記入の上、下記基金推進室まで郵送ください。折り返し、振込依頼書をお送りします。寄附申込書は、基金推進室に法人名・住所・電話番号をお知らせいただければ送付します。あるいは左記のサイトから書式をダウンロードすることもできます。



<http://www.kobe-u.ac.jp/info/kikin/kifu-enterprise.html>

【神戸大学基金ホームページ】

神戸大学基金について、詳しくは左記のホームページをご覧ください。



<http://www.kobe-u.ac.jp/info/kikin/top.html>

お知らせ

皆さまの、貴重なご意見、ご感想など、一

言メッセージを神戸大学基金推進室にお寄せください。

【神戸大学基金推進室】



E-Mail: kikin@office.kobe-u.ac.jp

寄附者からの一言メッセージ

寄附をしていただいたみなさんから、次のようなメッセージが基金推進室に寄せられました。

【私はこんな理由で寄附しました】

- 優秀な学生さんを多く育てて下さい。
- 卒業40周年の記念です。
- 神戸大学が大好きで、これからも発展をお祈りしています。
- ここで学んだことに感謝しています。
- 少額で申し訳ありませんが色々な活動の足しにしたいだければ幸いです。
- 母校に愛をこめて。
- 大切な思い出の4年間に感謝して。
- 神戸大学を応援したいので。
- 良い環境で学んで欲しい。
- 神戸大学で学ぶ学生達の支援になればと思います。
- 後輩の為になれば。
- 我が子の母校となる神大のお役にたちたい。

発行のことば

神戸大学は、明治35年（1902年）の創立以来、開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を理念とし、社会に貢献する人間性豊かな指導的人材の育成と、普遍的価値を有する「知」の創造拠点としての世界的教育・研究機関たることを目指してきました。

● 今、20世紀都市文明からの転換が激しく迫られる中で、大学にはその創造力を発揮して新しい21世紀文明構築のさきがけとなることが求められています。「神戸大学ビジョン2015」は、その第一歩として、「世界トップクラスの教育・研究」「卓越した社会貢献・大学経営」の実現を目指しています。

● 「神戸大学基金」は、ビジョンの実現を加速するためのターボ装置です。ターボの力をより強力なものとするためには、神戸大学が社会により深く根を張り、そこからの支持と支援を拡大することが不可欠となっています。

● 本誌「神戸大学とわたし」Across the Boundariesは、神戸大学と社会の接点に取材し、「ビジョン」を先取りする取り組みを可視化すること、社会貢献の促進とビジョンの早期実現に資することを目的として発行されました。読者の皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

● 2010年1月1日

※表紙題字下の「メタモルフオーゼ」は、生物学でいう「変態・変身」の意。本誌は神戸大学が21世紀に飛躍する様を追いかけます。

神戸大学とわたし

Across the Boundaries
通巻第10号 No.10
2014年2月20日発行

発行人 国立大学法人神戸大学
編集人 企画部社会連携課
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL: 078-803-5414
FAX: 078-803-5024



E-Mail: kikin@office.kobe-u.ac.jp



*Toward Global Excellence
in Research and Education*